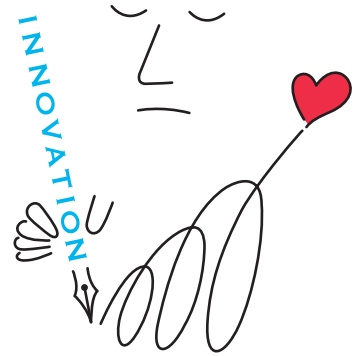




木村 ひとみ

KIMURA Hitomi

日本新薬取締役
サプライチェーン・信頼性保証担当独自のイノベーションで
新たな価値を創出し、
関西、日本を元気に

日本の近代医療は、明治時代以降、西洋医学を基盤として整備されてきました。当時使用されていた医薬品の多くは欧米からの輸入に依存していましたが、第1次世界大戦によってドイツからの輸入が途絶えたことを機に、国産化の動きが本格化します。

日本新薬が京都の地で創業した1919年は、まさにそのような時代でした。創業者・市野瀬潜は、「日本人ののむ薬は、日本人の手でつくりたい」という強い信念のもと、幾多の困難に直面しながらも工夫と挑戦を重ね、日本で初めて回虫駆除剤「サントニン」の開発に成功しました。これは、極めて画期的な出来事でした。当社のイノベーションの歴史は、ここから始まっています。

現在、当社ではDE&Iに注力しており、「女性活躍推進」「障がい者活躍推進」「LGBTQへの理解促進」「シニア人材の活躍支援」の4つのテーマを柱に取り組みを進めています。

「女性活躍推進」では、製薬会社が製造業の中で比較的女性社員の比率が高いこともあり、女性社員が自らの働き方や働きがいを見つめ直し、今後のキャリア形成につなげるワークショップなどを開催しています。「障がい者活躍推進」では、職場定着と活躍を重視した業務設計を進めています。また、「LGBTQ」に関しては、全従業員を対象に理解促進や啓発活動を継続的に行っています。男性用・女性用に加え、「だれでも利用できる」お手洗いを設置していることも、その取り組みの一環です。さらに、「シニア人材の活躍支援」では、培ってきた経験と専門性を生かした役割設計を重視しています。例えば調達部門で製造委託を外注するにあたり、医薬品の合成工程に精通した研究開発出身のシニア社員を配置するなど、各配属先で専門性を発揮できる仕組みづくりを推進しています。

私は、関経連では労働政策委員会およびD&I専門委員会の副委員長を務めていますが、昨今注目されているテーマは「外国人材の活躍」です。人口減少や少子高齢化、グローバル化の加速という大きな変化に直面する日本で、労働力の確保と持続的な成長には、多様な人材が活躍できる社会の実現が不可欠です。そのためには、「高度な専門性を有する人材」と「特定の技能によって社会を支える人材」の双方が能力を発揮できる環境整備が肝要です。その際に重要となるのが、企業や地域社会における多様性の包摂や多文化共生の考え方です。委員会では、きめ細かな情報交換や共有を行い、各企業の協力も得ながら、実効性のある施策を打ち出せるよう取り組んでいます。

また、関経連ではマルチステークホルダー資本主義に基づく企業経営を提唱していますが、最後に当社の地域社会に向けた取り組みを2つご紹介します。

一つ目は、子どもたちの未来への貢献を目的として2009年に創設した「日本新薬こども文学賞」です。年齢やプロ・アマを問わず、「物語」と「絵画」の2部門で作品を公募し、両部門の最優秀作品を基に絵本2万冊を制作、全国の小児科医院をはじめとする医療機関や図書館などの公共施設に寄付しています。

もう一つは、都市対抗野球大会に通算38回、日本選手権大会に26回出場している硬式野球部による社会貢献活動です。球児を対象とした野球教室や、未就学児向けの運動教室を開催しており、毎回多くの参加者でにぎわっています。

今後も、受け継いできた独自のイノベーションを追求する姿勢で新たな価値を創出し、さまざまなステークホルダーの信頼と期待に応えたいと考えています。そして、関西、ひいては日本全体を元気にする存在であり続けたいと思います。(談)